

前 6 世紀後半のアテナイ芸術における テセウス表現の変化とその背景

森園 敦

はじめに

テセウスはアテナイ古典期において、最も重要な国民的英雄として扱われていた。しかし、テセウスはある時期までそれほど注目された英雄ではなかった。アッティカ芸術において前 6 世紀後半までは、ヘラクレスを主題とする作品が圧倒的に多かった。

しかしある時期を境に、テセウスを主題とする陶器画や彫刻作品が数多く作られ、主題も多種多様なものとなり、前 5 世紀初めには結果的にヘラクレスを凌ぐようになる。本研究ノートでは、その時期をアルカイック後期、特に前 510 年頃と想定して考察していく。

第一章では、前 510 年以前のテセウス表現に着目し、この時期のアテナイにとってテセウスがどういった英雄であったかを述べる。第二章では、前 510 年頃から始まるテセウス表現の変化を明らかにし、その変化の原因を当時のアテナイの社会状況に求める。そして前 510 年頃とは、テセウスが後にアテナイの国民的英雄となるその過程において、どういう意味を持っていたのかについて考察していく。

第一章 前 510 年以前におけるテセウス表現

アテナイ陶器画の世界において、テセウスを主題とする図像は前 510 年頃まで、ほぼ二種類の主題に限られていた。その一つがクレタ島におけるテセウスのミノタウロス退治である。アポロドーロスによると、クレタの王ミノスはアテナイを攻め、半人半牛の怪物ミノタウロスの餌食となる 7 人の少女と 7 人の

少年を9年ごとにクレタへ送るようアテナイに対して要求する。^① その3回目のときにテセウスは自ら志願してクレタへ赴き、ミノスの娘アリアドネの助けを借り、ミノタウロスを退治する。

図1は前550-540年頃に制作された作品である。^② 記された銘からも分かるように、画面中央の左の人物がテセウスで、右の、頭が牛になっている怪物がミノタウロスである。テセウスは左手でミノタウロスの角をつかまえ、右手に持った剣でミノタウロスを突き刺そうとしている。画面右端の長衣の女性は銘からも分かるようにアリアドネである。アリアドネは、テセウスが迷宮で迷わないよう糸玉を渡したという神話が示すように、右手に糸玉を持った姿で描かれている。

図2も同じ主題によって描かれたもので、前540年頃の作品である。^③ この作品においても同じく右にアリアドネと思われる女性が立っている。

これら二つの陶器画が示すように、テセウスによるミノタウロス退治は表現がある程度類型化されている。数量的には、前510年頃までのアッティカ陶器に限れば、LIMCによると計6点である。^④ これは、この時代にアテナイで最も好まれたヘラクレスを主題とする図像と比べるとはるかに少ない。例えば、ヘラクレスの最も典型的な12の難業の一つ、ネメアのライオン退治は、約60点近くある。^⑤ また、前510年までに描かれたテセウスのもう一つの主題である、マラトンの雄牛退治は、計3点である。こうして考えると、アッティカ陶器画において、テセウスを主題とする図像は、前510年まではそれほど一般的な主題ではなかったといえるだろう。

ではテセウスの英雄崇拝はいつ頃から行なわれていたのであろうか。これについては、アリストテレスが、ペイシストラトスの2度目の国外追放からのアテナイへの帰還の様子について述べたなかに、テセウスを祀る聖所テセイオンの存在が確認できる。

パルレニス付近の戦いに勝ってアテナイ市を取り、民衆の武器を取り上げてついに僭主政を確固たらしめた。(中略) 彼は民衆の武器を次のような仕方を取り上げた。すなわちテセイオンで武装者の査閲をした後、演説を始め、〈しばらくの間話を続けていた〉。^⑥

アリストテレスによると、ペイシストラトスはアテナイに帰還したとき、テセイオンで民衆の武器を取り上げたことになっている。つまりこれは、ペイシ

ストラトスの時代にはすでに、テセウスの崇拝がテセイオンにおいて行なわれていたことを示すものである。⁴⁷

ここで問題になるのは、ペイシストラトスとテセウスの関係である。ペイシストラトスは前 6 世紀中頃のアテナイにおいて最初の僭主となる人物である。古代ギリシア世界において、政治家がある特定の英雄を重んじ、国内でその英雄の崇拝が盛んになるといった例は少なくない。テセウスについていえば、前 5 世紀初頭のキモンの時代に、スキュロス島でテセウスの骨が発見されたといわれ、アテナイ市民はテセウス自身が帰ってきたかのように、華々しい行列と儀式とをもって迎えたという記述がプルタルコスの中にある。⁴⁸ そうしたテセウスと政治家の関係について、アルカイック期におけるペイシストラトス家（ペイシストラトスと二人の息子であるヒッピアスとヒッパルコス）がテセウスをアテナイの偉大な英雄として最初に意欲的に“promote”したのではないかと、多くの研究者が論じている。

しかしこのことを裏付ける文献、芸術作品は存在しない。そしてウォーカーもこの説に真っ向から対立し、この説を主張する研究者があげた根拠を一つずつ丁寧にとりあげ、それらを不確定なものとしてこの説を否定している。⁴⁹

ウォーカーはまず、ペイシストラトス家とテセウスの関係を主張する研究者の根拠を、ペイシストラトス時代におけるテセウスの詩、ペイシストラトス家がテセウスを模範としたこと、ペイシストラトス家の政策とテセウスの政策の類似、そしてペイシストラトス家のテセウスに対する英雄崇拝の 4 つに分けている。

まずペイシストラトス時代におけるテセウスの詩について考える。コナーは、ペイシストラトス時代にシモニデスが詩人として最初にテセウスを扱ったとしているが、ウォーカーは、ペイシストラトス以前にもテセウスを扱った詩人は多くいるとしている。そして、シモニデスは前 468 年まで生きていたことをあげ、ペイシストラトスの時代にテセウスに関する詩を書いたとは限らないとし、こうしたテセウスの詩が、前 6 世紀に存在したことを裏付ける証拠は全くないと否定している。

次にペイシストラトス家がテセウスを模範としていたことについて考える。コナーはテセウスの神話とペイシストラトスによる歴史的事実の類似を見出している。テセウスのパレンティダイに対する勝利と、ペイシストラトスのエウパトリダイに対する勝利が同じパレネの地で行われたものだというのである。しかしウォーカーは、テセウスのパレンティダイに対する勝利をモチーフとし

て最初に美術作品において表現されたのは前 450 年頃であることを根拠に、ペイシストラトスによる歴史的事実とつながるにはあまりにも時代が離れているとしている。またテセウスによるマラトンの雄牛退治と、前 546 年のマラトンにおけるペイシストラトスのアテナイ人に対する勝利という地理的な類似についても、アテナイ人を雄牛にたとえるのはあまりにも“grotesque”なものであると否定している。

次にペイシストラトス家の政策とテセウスの政策の類似について考える。伝説によるとテセウスは、アテナイの守護神である女神アテナを祭るパナテナイア祭を創設したといわれる。コナーとヘルターはペイシストラトスの時代に、パナテナイア祭の規模が拡大され一新されたとしているが、実際にはペイシストラトスより以前の為政者ヒポクレイデスが前 566 年に行ったことであるとウォーカーは主張する。そしてペイシストラトスはパナテナイア祭には、ホメロスの吟唱を付け加えたのみであるとし、ペイシストラトスの政策とテセウスの政策が類似しているというコナーやヘルターの論を否定している。

次にペイシストラトス家のテセウスに対する英雄崇拜について、ウォーカーは、僭主と英雄の間には何の関係もないとし、僭主にとって英雄は手本でもなければ、政治上の模範でもない、むしろライバルであったのではないかとしている。

ペイシストラトスはむしろテセウスよりはヘラクレスを重要視していたのではないだろうか。ペイシストラトスとヘラクレスの関係については、ボードマンの説を取り上げたい。⁶⁰ ペイシストラトスは神話を現実的なレベルでとらえ、利用した政治家であったとされている。つまり自分自身を神話中の人物に置き換えて政治的に利用したのである。その例として、次にあげるのは、彼が 1 回目の国外追放からアテナイへ帰還した時についての、ヘロドトスの記述である。

ここにパイアニア区の住人で名をピュエといい、身の丈は 4 ペキュスにわずかに 3 ダキュテュロス足らぬほどの大柄で、そのほかの点でも容色すぐれた女がいた。メガクレスの一党は、この女に完全武装させて車に乗せ、最も効果的なポーズをとらせて町へ乗り込ませたのである。これに先導の触れ役が先発して、町へ到着するや命ぜられたとおり次のように触れた。

「アテナイの町の衆、快くペイシストラトスをお迎えなされ。畏くもアテナ女神ご自身が自ら世の誰よりもこの方を大切に思われ、ご自身のお住まいなされるアクロポリスへ、お連れ戻しになるところですぞ。」

触れ役がこのように町中を触れて廻ると、アテナ様がペイシストラトスをお連れ戻しになったという噂がたちまち田舎にまでひろまり、町の者はその女を真の女神と信じて、実は神ならぬただの人間である女に折りを捧げ、かくてペイシストラトスを迎え入れたのであった。⁽¹¹⁾

ここにみられるように、ペイシストラトスは人間の女にあたかも女神アテナであるかのように変装させ共に行進することで、自分がアクロポリスへ入城することは女神アテナの意志でもあるのだ、と見せかけたのである。またペイシストラトスはその女神の横に立った姿は、ハーウィットやボードマンら多くの学者が指摘しているように、明らかにヘラクレスを想起させる。⁽¹²⁾ まさにそれは神話にある、女神アテナに連れられたヘラクレスがオリュンポスの神々へ引き入れられる（つまりヘラクレスの神格化）ときに行われた行進の場面を彷彿させるものであった。

そしてボードマンは、実際ペイシストラトスの時代に、ヘラクレスと女神アテナの行進の図像が増えてきたことを指摘している。

図3はその実例であるが、ここでヘラクレスは女神アテナとともに行進をしている。⁽¹³⁾ こうした陶器画は、ペイシストラトスのアテナイへの入城という歴史的事件が契機となって制作されたものであるとボードマンは推測している。ヘラクレスの神格化という神話は存在するが、ヘラクレスと女神アテナが共に戦車行進したという神話は存在しない。ペイシストラトスの歴史的事件と同時期にこうした図像が描かれたことを考え合わせると、ボードマンの主張は、批判はあるが、十分妥当である。⁽¹⁴⁾

このようにペイシストラトスは、ヘラクレスを偉大な英雄として重要視していたと推測される。確かに、テセウスによるミノタウロス退治やマラトンの雄牛退治の主題が、前6世紀中頃からアッティカ陶器画に現われるようになったということを根拠にして、前6世紀中頃におけるペイシストラトスの時代に、テセウスがアテナイにおいて特別な英雄として“promote”されたのではないかという説も考えられなくもない。しかし、仮に陶器画が政治的契機に影響を受けて描かれたと認めたとしても、前6世紀中頃においては数量的にも圧倒的にヘラクレスの図像が多いこと、またテセウスに関する主題の多様性の乏しさなどから考えても、ペイシストラトスがテセウスを特別視していたとは言い難いといえるだろう。そしてテセウスを描いた陶器画の少なさから考えると、アテナイ人たちも、テセウスを特別な英雄とは見ていなかったのではないか。

第二章 前510年頃のアテナイ社会とテセウス表現

第一節 テセウス表現の変化

テセウスの表現は前510年頃から変化を見せ始める。そして前5世紀に入ると、テセウスはアテナイの国民的英雄とみなされ、テセウスを主題とする図像はアッティカ陶器画において一般的なものとなる。

この章では、クレステネスの時代、つまり前510年頃の陶器画や彫刻作品をもとに、それまで一般的であるとはいえなかったテセウスに、どのような背景をもとにして注目が集まるようになったのかについて考察していく。

まずは陶器画について考えてみたい。

図4は前510年頃の作品である。⁽⁴⁾この二つの図は陶器の側面の裏表であり、同じ陶器に描かれたものである。ここに描かれた6つの戦いの場面はいずれもテセウスにまつわる物語である。図4-aの左から右へ、シニス退治、ミノタウロス退治、プロクルステス退治となっており、図4-bの左から右へ、スキロン退治、ケルキュオン退治、マラトンの雄牛退治と続いている。このうち、シニス退治、プロクルステス退治、スキロン退治、ケルキュオン退治は、テセウスが幼少期に過ごしたトロイゼンからアテナイへ向かう途中で出会った野盗の退治である。

シニスはコリントス地峡に住む野盗で、旅人に自らとともに木を曲げさせ、その後シニス自身は手を離し、木の伸張力によって旅人を投げ飛ばして殺していた。プロクルステスは、メガラからアテナイへの道中に住む野盗で、旅人を自分のベッドに寝かせ、その身長が短ければたたき伸ばし、長すぎれば身体の端を切り落として殺していた。スキロンはメガラ海岸に住む野盗で、旅人に自分の足を洗わせた後に崖から海に蹴落とし、大亀のえさにしていた。ケルキュオンはエレウシスとメガラの道中に住んでおり、通行人に相撲を強いて殺していた。

テセウスはこれら全ての野盗を、野盗が旅人を殺していたのとそれぞれ同じ方法で退治する。まさにこの図はその様子を描いている。この図のシニス退治において、テセウスはシニスを倒し、さらに両手で木を曲げようとする様子で描かれており、この後シニスにその木を持たせ、投げ飛ばすであろうことを暗示している。またプロクルステス退治においてテセウスは、プロクルステスを

ベッドに寝かせ、右手に斧を持ち身体を切り落とそうとする様子で描かれている。またスキロン退治の図では、崖を示す岩のようなものが描かれ、テセウスはそこからスキロンを逆さまに落としている。またケルクエオン退治では、テセウスはケルクエオンと相撲を組み、持ち上げようとしている。

第一章で述べた、その他のミノタウロス退治、マラトンの雄牛退治は、古くから知られるテセウス神話であるが、野盗退治は前 510 年頃に初めて描かれるようになった主題である。野盗退治を主題とする陶器画は前 510 年以降、アテナイ陶器画において非常にポピュラーなものとなる。

これらの野盗退治に関する神話が文献的に最初に現れるのは、前 5 世紀前半のバッキュリデスの詩である。シャピロは、陶器画が描かれ始めた前 510 年頃にこれらの野盗退治の神話が作られたのではないかと推測している。⁽¹⁶⁾ 野盗退治の神話がいつ作られたのであれ、この時期に急に陶器画に取り上げられるようになったということは、テセウスのこの主題が描かれる必然性がアテナイ社会の中に存在したはずである。

次にほぼ同時代の彫刻作品について考えてみたい。この時代の最も重要な建築物の一つとして、アテナイがデルフォイに奉納したアテナイ人の宝庫がある。この建築物のメトープ彫刻から考察する。

この宝庫の制作年代は正確には特定されていないが、多くの研究者が前 6 世紀後半、なかでも前 510-500 年頃であろうとしている。

図 5 の 9 つのメトープ彫刻は、この宝庫の中で最も目に付く場所である南側のメトープを飾っている。⁽¹⁷⁾ 目に付くというのはつまり、この宝庫より山上に位置するアポロン神殿へ上がっていく者たちにとって、まず南側が目飛び込んでくるということである。その南メトープに野盗退治を含むテセウスの英雄物語が描写されている。図 5-a はシニス退治、図 5-b はスキロン、あるいはプロクルステス退治、図 5-c はケルクエオン退治、図 5-d はプロクルステス、あるいはスキロン退治、図 5-e は女神アテナとともに、図 5-f はマラトンの雄牛退治、図 5-g はミノタウロス退治、図 5-h はアマゾン退治、図 5-i はパラスの息子とともに、と 9 つ全てがテセウスにまつわる物語となっている。そしてこのなかの 4 つの物語、図 5-a,b,c,d が野盗退治である。

こうした野盗退治が前 510 年代、つまりクレイステネスの時代から、なぜ急に陶器画や彫刻作品に取り上げられ始めたのかについて、ウォーカーはその時代背景を絡めながら考察している。アテナイは前 6 世紀前半、つまりソロンの時代にはすでに、アテナイから数十キロ離れた島、サラミス島の領有権をめぐ

ってメガラ人と争っていた。ソロンの時代においてもペイシストラトスの時代においても、それぞれ一度はその領有権を獲得したのであるが、前6世紀の終わり頃までその争いは続いていたというのが、研究者の一致する見解である。最終的にアテナイがその領有権を獲得するのであるが、ウォーカーはその決着を前509年、つまりクレステネスの時代であったと判断している。サラミス島はサロニコス湾内に浮かぶ島であり、そしてメガラの町はサロニコス湾沿いに位置する。そしてテセウスの野盗退治の冒険もトロイゼンからアテナイへと向かうサロニコス湾沿いである。つまりウォーカーは、メガラ人とのサラミス島の領有権争いという歴史的事件と、テセウスの野盗退治という神話物語との間に地理的な共通点を指摘し、おそらくアテナイのメガラに対する勝利を祝うために、こうしたテセウスのサロニコス湾沿いでの勝利をモチーフとした芸術作品が作られたのではないかと推測している。⁽¹⁸⁾

アテナイ人の宝庫に戻る。ウォーカーとボードマンは、この宝庫におけるテセウスとヘラクレスの両英雄の描かれ方を比較しながら論じている。この宝庫の北メトープにはヘラクレスの難業が描写されている。北側は南側よりも目に付きにくい側である。ヘラクレスはアルカイック時代を通して最も重要な英雄であり、彼の難業は陶器画、彫刻の両分野において最もポピュラーな主題であった。しかしこの宝庫において最も重要な位置となる南メトープにテセウスが描かれていることをウォーカー、ボードマンはともに重要視している。

さらに両者が最も重要な点としてあげているのが、南メトープにおける女神アテナの存在である。メトープ全体を通して、女神アテナが登場しているのは、南メトープにおける一度のみであり、テセウスと並んで立った姿である。もともと女神アテナはヘラクレスの最も親密な守護神であり、アルカイック時代の多くの陶器画や彫刻作品においてヘラクレスとともに描写されている。しかし、この宝庫の北メトープにおけるヘラクレスの難業の場面には、女神アテナは登場しておらず、テセウスの場面にも登場している。ボードマンはこれを非常に珍しいことであるとして重視し、ヘラクレスを犠牲にしてまで、テセウスに対して意図的に賛辞を送っていると述べている。⁽¹⁹⁾ ウォーカーもこの見解を肯定し、アテナイの町の守護神である女神アテナがテセウスの横に立つということは、テセウスがこの時期までにアテナイの最も偉大な英雄になっていたことを示すものであるとしている。⁽²⁰⁾

第2節 テセウス表現の変化の背景

ヘラクレスにまつわる物語はアルカイック期アテナイの芸術作品において最もよく取り上げられた主題であったが、ある時期を境にそれは減少方向へ向かい、テセウスの物語にとって代わられる。もともとテセウスの野盗退治の物語はヘラクレスの難業に対抗するような形で成立したものであるといわれ、両者の類似性はこれまでも指摘されてきた。しかし突然モチーフがヘラクレスからテセウスへ変化したのには、アテナイ社会においてなんらかの必然性が存在したのではないだろうか。

ヘラクレスはもともと、スパルタの所在するドーリス地方の英雄であり、アッティカ固有の英雄ではない。一方でテセウスは、神話の上で、アテナイの建国者であり、アテナイ最初の王として認識されていたことがプルタルコスからも分かる。⁽²¹⁾ アテナイにおけるこの両者のとらえ方の違いが、前 510 年頃のアテナイ社会のなかで重要な意味を帯びてくる。この節では前 510 年頃のアテナイの歴史的背景を再び検証し、なぜモチーフがヘラクレスからテセウスへ移行したのかについて考察したい。

まず前 510 年頃のアテナイとスパルタの関係について整理しておきたい。アテナイではペイシストラトスの二人の息子、ヒッピアスとヒッパルコス時代に僭主政は倒壊する。その過程を概観する。まず、前 514 年にヒッパルコスはアテナイ人であるハルモディオスとアリストゲイトンによって暗殺される。この後、ヒッピアスの統治は暴政と化す。ここにいたって、アテナイを解放せよとの神託を受けたとされるスパルタが、軍隊を派遣してアテナイへ介入したため、僭主政は倒壊する。ハルモディオスとアリストゲイトンは暗殺事件後すぐ処刑されるのであるが、同時に僭主政の解放者としてアゴラに彫刻が建てられ、アテナイ市民からたたえられる。図 6 はローマ時代の模刻であるが、この暗殺事件の様子を描写したものである。⁽²²⁾ しかし実は、この暗殺事件は恋人を巡っての争いという、政治的な事件とはかけ離れたものであった。スパルタが実質的にヒッピアスをアテナイから追い出し、僭主政を倒壊させたのであるが、それでもなおアテナイ市民が、この二人を僭主政の解放者としてたたえたのは、アテナイ人はスパルタの恩恵を好まなかったのであろうとウォーカーは推測している。つまり、アテナイ人は、アテナイ人自らの中からの英雄が僭主政を終わらせたと信じたかったのである。⁽²³⁾

またクレイステネスが台頭する直前にアテナイでは、イサゴラスとクレイステネスの貴族同士の間で政権争いが起っている。イサゴラスがスパルタに支援

を求めると、スパルタのクレオメネス王はアテナイへの介入の好機とばかりに再び軍隊を送り込もうとしたが、同盟国の支持が得られず断念する。このようにスパルタはこの時期にアテナイへ政治的な介入を何度か試みていた。²⁴⁾おそらくこの時期のアテナイ市民にとってスパルタは脅威であったろう。

こうした歴史的背景を考えると、スパルタに近いドーリス系のヘラクレスよりも、アテナイ固有の英雄であるテセウスが脚光を浴びるようになるのは十分に考えられる。そして、スパルタを想起させるヘラクレスではなく、テセウスにまつわる冒険談が、陶器画や彫刻などの芸術分野でモチーフとして取り上げられるようになったのであろう。前510年頃に、芸術分野においてヘラクレスの図像が減り、それに対抗するようにしてテセウスの野盗退治の物語が注目され、陶器画に描かれるようになったという必然性がアテナイ社会に存在していたのである。

クレイステネス以降、ペルシア戦争をはさんで、アテナイは強大なポリスとして確固たる地位を築き、民主政への道を歩むこととなる。サラミス島をめぐる対立、スパルタの介入、さらには前5世紀初頭に起ったペルシア戦争、そうした様々な外敵と接する中で、アテナイにおいて急速に国家主義的な思想が芽生え始める。アテナイ固有の英雄であるテセウスは、こうしたアテナイの国家主義的思想を反映し、発達した英雄であるといえるだろう。

おわりに

テセウス神話は前510年以降、さらに発達を遂げることになる。前5世紀前半のバッキュリデスの詩に、テセウスは海神ポセイドンの息子であるという記述が見える。²⁵⁾つまりテセウスの父親は、人間ではなく、神ということである。テセウスは本来、アテナイのアイゲウスの息子という神話が一般的である。テセウス一行がミノタウロス退治に行く途中の舟の中で、ミノス王はテセウスに対し、ポセイドンの息子であることの証明を要求し、海底に赴いて黄金の指輪を取ってくるように命じる。テセウスは、その指輪をポセイドンの妻であるアンフィトリテからもらってくる。この詩が書かれたバッキュリデス以降、この場面を描いた陶器画が急増する。テセウスが神の息子であるということが強調されることで、テセウスの地位がさらに上がったと考えられる。

またプルタルコスの記述にあるように、ペルシア戦争におけるマラトンの戦いとき、テセウスの亡霊がペルシア兵めがけて進んでいったという伝説がア

テナイ市民の中で広まっている。⁽²⁶⁾

さらにキモンの時代になると、第一章で述べたように、これもプルタルコスによるものであるが、テセウスの骨が発見され、それをアテナイ市民は喜んで、まるでテセウス自身が帰ってきたかのように華々しい行列と犠牲の儀式とをもって迎えた。

そしてデイビーが指摘するように、前5世紀後半に、エウリピデスの悲劇の中で初めて、テセウスは民主主義の設立者として描かれる。⁽²⁷⁾ このようにテセウスに対するアテナイ人の賛辞はますます高まっていく。

今回の研究ノートでは、テセウスの野盗退治を主題とした陶器画や彫刻作品に着目し、この主題が前510年頃にアテナイの芸術において急速にポピュラーになったという点から、当時のアテナイ人にとってテセウスがどういう英雄としてとらえられていたかについて考察してきた。

こうして考えると、これまで多くの研究者が提唱してきたペイシストラトス家の時代ではなく、クレイステネス期の前510年頃に、テセウスはアテナイの国民的英雄であるという考えがアテナイ社会に浸透し始めたといえるだろう。その考えが、前5世紀に入り、国民的英雄にとどまらず民主政の設立者というところにまで移行していったのだといえる。

芸術表現においては、それまで一般的とはいえなかったテセウスを主題とする図像が、前510年頃を境に数多く制作されるようになる。その後、前5世紀に入り、テセウスのアテナイの国民的英雄という地位が確固たるものになるにつれ、そうした図像がアテナイの陶器画や彫刻作品において一般的になることは、前510年頃はアテナイにおいてテセウスの賛辞が高まり始めた発端となる重要な時代であったということを表している。

以下の註において次の文献略号を用いる

ABV = J. D. Beazly, *Attic Black-Figure Vase-Painters*, Oxford, 1956

AJA = *American Journal of Archaeology*

ARV² = J. D. Beazly, *Attic Red-Figure Vase-Painters, 2nd ed.*, Oxford, 1963

JHS = *Journal of Hellenic Studies*

LIMC = *Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae*

RA = *Revue Archéologique*

註

- (1) アポロドーロス、摘要 I、7-9 (『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、1953)。
- (2) 黒像式キュリクス、Munich, Antikensammlungen 2243: *ABV* 163; *LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 233, pl. 661 (J. Neils).
- (3) 黒像式アンフォラ、Boston, Museum of Fine Art 1960. 1.: *LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 235, pl. 661 (J. Neils).
- (4) *LIMC* VII, s. v. Theseus, pp. 940-943 (J. Neils).
- (5) *LIMCV*, s. v. Herakles, pp. 17-28 (J. Boardman).
- (6) アリストテレス、『アテナイ人の国制』第 15 章 4 (村川堅太郎訳、岩波文庫、1980 年)。
- (7) H. A. Shapiro, *Art and cult under the tyrants in Athens*, Mainz am Rhein, 1989, p. 145. 前 6 世紀にテセウスの崇拝が行われていたことを示す文献資料はアリストテレスのこの記述のみである。そして、同じ事件について書かれたもう一つの文献、ポリュアイノスの記述にはテセイオンの代わりとしてアナケイオンとなっている。シャピロは、このことに触れ、もしかするとアリストテレスのフィクションかもしれないが、ペイシストラトスの時代にテセイオン、つまりテセウスの崇拝が存在したというのはいえぬことではないとしている。
- (8) プルタルコス『テセウス』36 (『プルタルコス英雄伝』村川堅太郎編訳、ちくま学芸文庫、1996)。
- (9) H. J. Walker, *Theseus and Athens*, Oxford, 1995, pp. 35-50.
- (10) J. Boardman, "Herakles, Peisistratos and Sons," *RA*, 1972.
- (11) ヘロドトス、1 卷 60 (『歴史』松平千秋訳、岩波文庫、1971)。
- (12) J. M. Hurwit, *The Art and Culture of Early Greece 1100-480 B.C.*, Ithaca and London, 1985, pp. 234 f.
- (13) 黒像式ヒュドリア、Paris, Louvre F 295: *ABV* 260, 31; *LIMC* II, s. v. Apollon, no. 836, pl. 286 (W. Lambrinudakis).
- (14) M. B. Moore, "Athena and Herakles on Exekias' Calyx-krater," *AJA* 90,

1986, p. 38; W. G. Moon, "The Priam Painter: Some Iconographic and Stylistic Considerations," in: W. G. Moon (ed.), *Ancient Greek Art and Iconography*, London, 1983, pp. 97-109; R. M. Cook, "Pots and Pisistratan Propaganda," *JHS* 107, 1987, pp. 167-169. ボードマンによる、前6世紀中頃における陶器画にプロパガンダの性格があったとする説は、研究者の間で、あまり受け入れられていないというのが現状である。ムーア、ムーンそしてクックは、ヘラクレスの神格化という主題が最も多く描かれたのは、ペイシストラトスのアクロポリス入城後の約30年後、つまり前6世紀の後半であることをあげ、作品の年代を根拠にボードマンの説を否定している。しかし、ヘラクレスの行進の主題が描かれはじめたのがペイシストラトスの時代だったという事実は否定できない。筆者としてはこの点を重要視し、ボードマンの説を支持したい。

- (15) 赤像式キュリクス、Firenze, Museo Archeologico: *ARV*² 108, 27; *LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 33, pl. 623 (J. Neils).
- (16) H. A. Shapiro, *op. cit.* (n. 7), p. 144.
- (17) 『アテナイ人の宝庫、南メトープ』、デルフォイ、*LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 54, pl. 633 f (J. Neils).
- (18) H. J. Walker, *op. cit.* (n. 9), pp. 50 f.
- (19) J. Boardman, "Herakles, Theseus and Amazons," in: D. Kurtz and B. Sparkes (ed.), *The Eye of Greece*, London, 1982, pp. 4 f.
- (20) H. J. Walker, *op. cit.* (n. 9), pp. 52 f.
- (21) プルタルコス『テセウス』24 f.
- (22) 『僭主殺害者群像 (ハルモディオスとアリストゲイトン)』、ナポリ考古博物館。
- (23) H. J. Walker, *op. cit.* (n. 9), pp. 51 f.
- (24) ヘロドトス、5巻70-75。
- (25) バッキュリデス、第16歌 (『世界名詩集大成1 古代・中世』平凡社)。
- (26) プルタルコス『テセウス』35。
- (27) J. N. Davie, "Theseus the King in Fifth-Century Athens," *Greece and Rome* 29, 1982, p. 28; エウリピデス『救いを求める女たち』353、404-408、433-441 (ギリシア悲劇Ⅲ、ちくま文庫、1986年)。

挿図リスト

- 図 1、黒像式キュリクス、Munich, Antikensammlungen 2243: *ABV* 163; *LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 233, pl. 661 (J. Neils).
- 図 2、黒像式アンフォラ、Boston, Museum of Fine Art 1960. 1.: *LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 235, pl. 661 (J. Neils).
- 図 3、黒像式ヒュドリア、Paris, Louvre F 295: *ABV* 260, 31; *LIMC* II, s. v. Apollon, no. 836, pl. 286 (W. Lambrinudakis).
- 図 4、赤像式キュリクス、Firenze, Museo Archeologico: *ARV*² 108, 27; *LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 33, pl. 623 (J. Neils).
- 図 5、『アテナイ人の宝庫、南メトープ』、デルフォイ、*LIMC* VII, s. v. Theseus, no. 54, pl. 633 f (J. Neils).
- 図 6、『僭主殺害者群像 (ハルモディオスとアリストゲイトン)』、ナポリ考古博物館。

挿図



図 1 黒像式キュリクス、Munich, Antikensammlungen 2243



図 2 黒像式アンフォラ、Boston, Museum of Fine Art 1960. 1

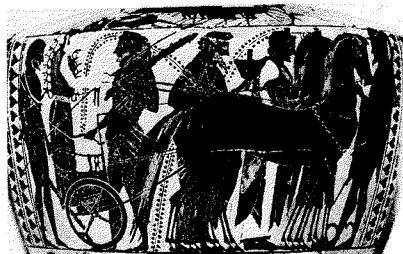


図 3 黒像式ヒュドリア、Paris, Louvre F 295

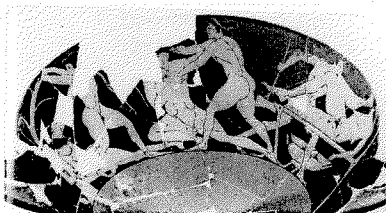


図 4-a 赤像式キュリクス、
Firenze, Museo Archeologico

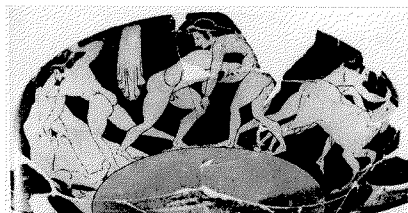


図 4-b

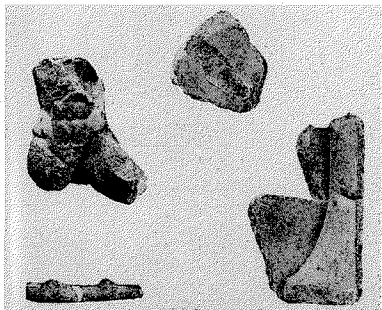


図 5-a 『アテナイ人の宝庫、南メトロプ』、
デルフォイ



図 5-b

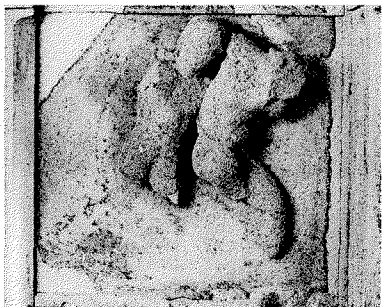


図 5-c



図 5-d



図 5-e



図 5-f



図 5-g

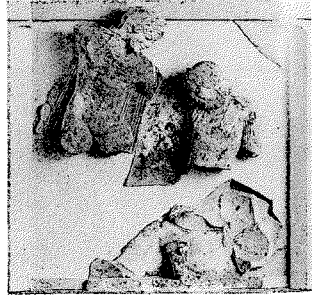


図 5-h



図 5-i

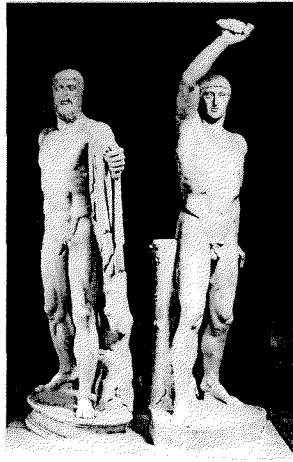


図 6 『僭主殺害者群像（ハルモディオスとアリストゲイトン）』、
ナポリ考古博物館

The change of Theseus story in classical Athens

Atsushi MORIZONO

Theseus was the greatest national hero in classical Athens. In the middle of the sixth century, Theseus was represented on Attic vase painting in two following themes: the fights against the Minotaur and the Bull of Marathon. The products of these iconographies were, however, quite limited. Depictions of Herakles, on the other hand, were very common and were far more popular than that of Theseus during this period. Around 510 B.C. Theseus scenes began to change. From 510 B.C. the theme of battles between Theseus and bandits appeared. They happened in his journey from his homeland Troizen to Athens. As the result of this change, Herakles scenes were reduced in number and replaced by Theseus scenes.

Walker explained this replacement of subject from Herakles to Theseus around 510 B.C. in the historical and political context in Athens. While Herakles was taken to be a Dorian hero, the Athenians saw Theseus as their own hero. In this time Athenian citizens saw Sparta as threat, because the Spartans repeatedly tried to intervene in the politics of Athens in the last quarter of the sixth century. So the Athenians set Theseus up as a rival to the widely admired hero of the Dorians, and the Athenian artist began to adopt the Theseus story.

Theseus was a hero who incorporated in nationalistic thoughts of Athenians that grew up through contacts with foreign invaders, for example the Spartans. In classical Athens a compliment to the hero was risen more and more. In the half of the fifth century, Bacchylides developed another story that Theseus was the son of Poseidon. That is to say, he was descended from god. We can find that during this period he was already firmly taken to be a national hero of Athens.

In this paper I try to explain that the great change occurred at ca. 510 B.C., by which Theseus became decisively the greatest national hero of Athens.